

令和2年度

小金井平和の日記念行事

# 「平和作文集」

小金井市

## はじめに

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を3年ごとに行っています。昭和28年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年12月20日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和35年10月3日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和57年4月1日には、世界の唯一の核被爆国として、また、平和憲法の本質からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和54年3月20日に制定された「小金井市市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと、平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「非核平和映画会」、「平和行事参加の旅」、「原爆パネル展」、「平和講演会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和首長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成26年12月18日に戦後70年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないため、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、「小金井平和の日条例」を制定しました。

この文集は、同条例に基づいて実施した平和の日記念行事における作文コンクールの応募作の中から4編を選定し、文集にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にしていいただければ幸いです。

令和3年3月

企画財政部広報秘書課

# 目 次

○小金井平和の日記念行事作文コンクール

## 【入賞作文】

### 小学生の部 大賞

「一つだけの花、一つだけの命」

村田 結子（小金井第三小学校 4年生）・・・・・・・・・・ 1

### 小学生の部 優秀賞

「命を大切にすること」

松田 勢大（緑小学校 2年生）・・・・・・・・・・ 3

### 中学生の部 大賞

「平和を守るためにすべきこと」

箱井 真理（緑中学校 3年生）・・・・・・・・・・ 5

### 中学生の部 優秀賞

「未来への分岐点～平和～」

徳永 楓（東中学校 2年生）・・・・・・・・・・ 7

## 小学生の部 大 賞

「一つだけの花、一つだけの命」

村田 結子（小金井第三小学校 4年生）

「一つの花」という物語を知っていますか私は、学校の授業で「一つの花」という物語を知りました。この物語は、戦争中まだかた言しか話せないゆみ子が、お母さんと一緒に出征するお父さんを見送りに行った時のお話です。

私は、「一つの花」を初めて読んだとき、「一つだけ、一つだけ」というゆみ子の事を自分勝手だと思いました。それは、戦争当時ごはんさえ食べられるかどうか分からないのに、一つしかないものまで、ゆみ子が他の人からもらおうと、その人の一つだけのものがなくなってしまうからです。

しかし、戦争当時と戦争後の場面を比べたとき、私の考えは変わりました。なぜなら、戦争当時は、お米の代わりに配給されるおいもや豆やかぼちゃも少ししかなく、満足してもものが食べられる状況ではありませんでした。一方、戦争後は少しずつ町が平和になって、町へ行けばお肉やお魚が手に入るようになりました。つまり、十分に満足できるまで、ものが食べられる状況になったのです。ゆみ子が自分勝手だったのではなく、戦争がそのような状況にさせてしまったのだと思いました。

また、ゆみ子はお父さんから最後の贈り物としてコスモスの花をもらいます。お父さんは、「一つだけのお花、大事にするんだよ。」と言ってゆみ子に渡します。食べるものにさえこまっている当時の人にとってコスモスの花は忘れられたようなそんざいだったのかもしれませんが、でも、本当に忘れられていたのは、当時の人々、一人一人の命の大切さだと思いました。私は、お父さんが一つの花をゆみ子の一つの命と重ねて渡したのだと思います。生きのびてほしい。そして、一つだけの命を大事にするんだよと伝えたかったのではないのでしょうか。

今の私は、戦争がなくて幸せだと思います。それは、好きなものを食べ、好きな事ができるからです。筆者は「一つだけ」という言葉に、平和への願いをこめているのではないかと思いました。そして、私たちは、今の平和を

守らなければいけないと思いました。私は、平和を守るためにできることは何か考えてみました。今の私にできることは、色々なことをたくさん勉強して、物事を正しく判断できる人になること。そして、命を大切にすること。思いやりと勇気を忘れずにいたいと思います。

## 小学生の部 優秀賞

「命を大切にすること」

松田 勢大（緑小学校 2年生）

ぼくの家にはない黒っぽい戸だなのようなものが、じいじばあばの家にあります。そこには大きながくぶちに入ったおじいさんの写真がかざってあります。その人は「じーちゃん」だとばあばが教えてくれました。じーちゃんはぼくのひいおじいちゃん、ぼくが生まれる前にびょう気で亡くなったので、ぼくは直せつ会ったことはありません。じーちゃんが昔せんそうに行っていたとばあばから聞いて、ぼくはおどろきました。せんそうはずっとずっと昔のことだと思っていたからです。

じーちゃんは、大ほう隊の中隊長でした。せんそう中じーちゃんは心に強く決めていたことがあったそうです。それは、隊の仲間をなるべく死なせないことです。じーちゃんはみんなの命もとても大切に、おなかが空いてつらい思いをしないように工夫したり、みんなで生きのこることを目ひょうにしていたそうです。せんそうに負けたあと、じーちゃんたちはシベリアにつれて行かれました。ぼくは地きゅうぎでシベリアをさがしてみました。北きよくに近くて、とてもさむい場所だと知りました。さむさで死んでしまう人がたくさんいたそうです。せんそうがおわって、隊長と部下のかんけいもうなくなっていたのに、仲間の兵隊さんたちは、じーちゃんをさむさから守ってくれたそうです。せんそう中にじーちゃんがみんなの命を大切にしていたから、じーちゃんも大切にされたのだとぼくは思いました。

日本人の兵隊さんも、てきの兵隊さんも、ふだんはふつうにくらしている人なのに、相手をころすためにせんそうに行かなければいけません。兵隊さん一人一人に注目したら、きっと家には心配して待っている家族がいて、家にいる時は家族と笑ってすごしているふつうの人だと思います。ふつうにくらしている時には、人をころさないのに、せんそうではころしても良いなんておかしいと思います。人が死ぬことはすごく悲しいことなのに、せんそうだからしかたないなんておかしいと思います。

じーちゃんの話をおあばから聞くまで、ぼくはせんそうのことをくわしく考えたことはありませんでした。ぼくはころしあいなんてしなくても良い時だいに生きています。そのことをとてもうれしく思っています。せんそうがない時だいがこれからもつづくために、ぼくに何ができるのかはわかりません。でも、じーちゃんのように、みんなが自分の命だけではなく、他の人の命も大切にできるようにになれば、少しだけ世界から悲しいことがへって、少しだけ世界が平和になるのかもしれないなと思いました。ぼくみたいなふつう人がころしあいなんてしなくても良いように、せんそうがない時だいがずっとずっとこれからもつづきますように。

## 中学生の部 大 賞

「平和を守るためにすべきこと」

箱井 真理（緑中学校 3年生）

この数か月間、これほど日々の平和やありふれた幸せについて考えさせられたことは無かった。今年の初め、コロナウイルスのために私たちの生活は一変した。一時は学校へ通うこともできなくなり、中学校生活最後の体育祭も修学旅行も中止になってしまった。それでも私はまだ、ましな方なのだろう。職を失った人もいるし、自殺に追い込まれてしまった人もいるのだから。いろいろと我慢を強いられるなか、ともすれば不満が口を出してしまう私に、「仕方がないよ、今は言わば戦時下のようなものだよ。」と父は言った。確かに程度の違いはあるが、自分の周りの人の命の心配をし、いつ終わるともわからない不安を抱えて不自由な生活を送ることは、戦時中のそれに似ているかもしれない。今まで遠くに感じていた戦争というものが、急に身近に感じられて、私は怖くなった。私が難なく手にしていた平和な日常は、こんなにも脆いものであることを知ったし、危うくなって初めてその有難みがわかった。今なら私はどうやって平和な日々を守っていくべきか、真剣に考えることができるように思う。

まず第一に、平和を脅かすものとして、自然災害や病気のような天災と、人間が意図的に始める戦争・紛争のような人災を一緒に語ることはできないと思う。天災の場合は抗いようがないので、父の言うように「仕方がない」と受け入れ我慢することも必要だし、予防と復興という力を注ぐ方向がはっきりしている。では戦争はどうであろう。戦争は明らかに平和を破壊する悪であるが、勝った側と負けた側で評価が異なるし、その背景となるものが宗教であったり民族的な価値観の違いであったりと原因が複雑で、万能な抑止策は存在しないように思われる。戦争を無くすことが難しいことは、度重なる戦争の歴史を見ても明らかだ。それでも、どうにか同じ過ちをくり返さないために、私たちは過去から学ぶのだろう。私は今、歴史の授業で太平洋戦争について学んでいる。戦争についてのたくさんの資料や映像を見るにつけ、



どうして戦争を始めてしまったのか、どうして勝利を信じていられたのか、どこに命という犠牲を払うだけの価値があったのか、どうしてもっと早く終わらせることができなかつたのかと、疑問ばかりが湧いてくる。私は戦時下を生き、または戦争で死なざるを得なかつた人々の本音が知りたくて、「きけ、わだつみのこえ」などの本も読んでみた。そこには残してゆかねばならない愛する者たちへの感謝、心残り、自分の人生への無念、誇り、死への覚悟、恐怖といった様々な感情があふれていた。一見相反するような感情も、どれも心の底からの真実なのだと思う。その中でも平和を再び取り戻すことは、すべての人の悲願だったと読み取ることができた。それなのに、戦争という混乱した渦の中にあつて極限状態に置かれれば、教育の偏向や情報操作、集団心理などの様々な要因と相まって、人は正常な判断能力を失うのだと思う。今、時間を置いて客観的な目でかつての戦争について検証をしたならば、たくさんの反省点や教訓を得ることができるだろう。そうした過去からの学びを踏まえて、結局は個々人の「争いは避けるべき」という信念が集まって大きな抑止力を作っていくしかないように思う。でももしかしたら人は、本能の中に競い争うという習性が埋め込まれているかもしれない。それならば、その本能を抑え込むのは理性であり、その理性を形成、強固なものにするのもやはり学びから得た知識に他ならないと思う。お互いを知り理解するため、より良い関係を築く方法を探るために、やはり学びは大切なのである。私たちの学校での勉強には、こうした意義がある。私たちは知らないことがたくさんあることを自覚して、視野を広げる努力をしなければいけないと思う。

もう一つ、心に留めておきたいことがある。法律を学ぶ兄に教えてもらったことだが、民法には「権利の上に眠る者は保護されない」というルールがあるらしい。つまり、大切なもの（権利）を獲得した後も、それを追及し続けないと失ってしまうということらしいのだが、私は同じことが平和（大切なもの）にも言えると思うのだ。平和は脆い。だから今ある平和に慣れて安心してしまわないで、常に平和を守る努力を怠らないという姿勢が大切なのだと思う。

## 中学生の部 優秀賞

「未来への分岐点～平和～」

徳永 楓（東中学校 2年生）

私は中学生になって、「平和」や「戦争」について考え、向き合うことが増えました。それまでの私にとっての戦争は、「昔に起こった怖い出来事」、「それぞれの国のトップによって起こる、どうする事もできないもの」でした。そんな私の考えが変わるきっかけとなったのは、広島市の平和祈念資料館へ行った事です。想像を絶するような写真の数々、何よりもリアルな当時のままの展示品を見ていると今までのどこか人ごとのような考えはなくなっていきました。また、今年は戦後七十五年という節目の年であり、学校などでも平和や戦争をテーマとした特集番組もたくさん目にし、強く衝撃を受けました。

私の祖父母の家は広島市内にあります。だから私は、生まれてから毎年、一年に一度の初日の出は「比治山」という山の上から見ていました。その「比治山」が学校で見た戦争に関する特集番組に出てきたのです。私はその時目にした比治山と、毎年行っている比治山をすぐに結びつける事はできませんでした。番組に出てきた比治山は、原爆投下直後、なんとか生き延びた人々が避難しに来ているかもしれないという、まるで「生と死の狭間」のような場所だったからです。私が山頂から眺めていたのは美しい日の出と自然豊かな景色です。それが七十五年前は、今と真逆で地獄のような景色だったという事は、私にとってすごく受け入れ難い事でした。

また、戦争中に生きる事の「過酷さ」をリアルに感じたのは平和記念資料館で、当時、建物疎開作業をしていた私と同じ中学生達の服を見た時です。その時、まさかこれらが全て本当に中学生の服だとは、信じられませんでした。なぜなら、それらの服はどれも今の小学一年生くらいの大きさだったからです。私の周りには、そこまで小さな友達はいません。だから、それらの服を見るだけで、当時の中学生は十分に成長する事すらできなかったのだと分かりました。同じ中学生なのに、数十年違う時代に生まれただけで、簡単

に「当たり前」は変わってしまうのだと気付きました。

私は戦争について考え、知った事でやっと戦争の本当の怖さ、無意味さに気付く事ができました。また戦争は「昔の出来事」ではなく、これからも起こりうるものだと思います。だからこそ、私は二度とこんな悲しく辛いだけの戦争が起こってほしくありません。そのためには全ての人が、過去の戦争の歴史を知り、平和を守る気持ちを強く持つ事が大切だと思います。

当時の日本は言論統制や軍国教育などで、国民の言論や思考の自由を奪っていました。しかし、今の日本は国民の言論や思考の自由があります。だからこそ、世界の情勢や政治の動きに目を向けて、それに対する自分の意見を一人一人がしっかりと持ち、平和を願う気持ちを言葉や行動にするべきだと思います。

今の日本は平和です。私は戦争について考え、向き合うようになってからもまだ、戦争は本当に怖いと思っています。しかし、今はそれを過去の出来事としてとらえず、これからもずっと、起こりうるものだと思うようになりました。そして、二度と戦争を起こさないようにするには、私達国民が世界、日本、戦争などの問題に向き合い、声をあげる事が一番大切だと、今は思っています。平和な今だからこそ、国民が自分の気持ちを自由に伝える事ができる時代だからこそ、一人一人がしっかりと平和について考えるべきだと思います。戦争によって奪われた世界中の命を無駄にしないため、この世界を大切にし、世界へと広げていきたいです。

## 平和作文集

発行 令和3年3月10日  
小金井市

編集 小金井市企画財政部広報秘書課広聴係  
小金井市本町六丁目6番3号  
☎042-387-9818